連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「足利義尚～豊後産硫黄を中国へ輸出～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2023 年 5 月 26 日(金)

輸出用硫黄を産出していた伽藍岳（由布市）

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

足利義尚

豊後産硫黄を中国へ輸出

室町時代の日本と明との間で行われた勘合貿易では、中国から生糸や銅銭、陶磁器などを輸入し、日本からは銅や刀剣、扇などを輸出しましたが、最大量の輸出品は硫黄でした。「戊子入明記」という史料によると、寛正6（1465）年の遣明船には「四万斤」（24トン）の硫黄が積み込まれ、そのうち1万斤を明の成化帝へ進上し、残り3万斤を売買するものだったことが分かります。

文明5（73）年、9歳の若さで第9代将軍の地位に就いた足利義尚は、遣明船を積極的に派遣した第8代将軍の父足利義政に倣い、輸出用硫黄の調達を図ります。

文明13（81）年のものと推測される「足利義尚御内書」（将軍発給の公文書）を読むと、義尚は豊後の守護大名大友政親に、「渡唐の儀につき、硫黄の事、前々のごとく申し付け候はば喜悦候」と書き送っています。「渡唐」つまり中国に渡す遣明船に積み込む硫黄の調達先が、九州の豊後（大分県）だったことが分かります。しかも、その文面に「前々のごとく」とあることは、豊後産硫黄の調達が一度限りのものではなく、恒常的なものだったことを示しています。

実は、日本から中国への硫黄の輸出の歴史は、さらに500年ほどさかのぼった10世紀末から確認できます。宋代の中国では、鉄砲など火器の利用が拡大し、黒色火薬の原料としての硝石、硫黄、木炭の需要が急増しました。11世紀になると、宋政府は、日本から大量の硫黄を買い付けることを計画し、また、軍需物資としての硫黄を国家的管理の下に置きます。広大な国土に見える中国ですが、実は硫黄を産する火山が少なく、国外からの輸入に頼っていたのです。

将軍義尚から輸出用硫黄の上納命令を受けた大友政親は、二つの産地で、その採掘を行います。それは、由布院盆地の北方に位置する標高1045㍍の伽藍岳と、くじゅう連山の一つで標高1580㍍の硫黄山という、豊後国内有数の火山です。すでに大友氏は、14世紀後半期に、領国内のこの二つの硫黄産地を直轄支配し、そこからの硫黄鉱石の搬出ルートも整備していました。

このように、将軍足利義尚は、中国へ輸出する硫黄の調達を、火山が多く、かつ遣明船の航海路上に位置する九州の豊後に求めました。一方、その要請を受けた豊後の守護大名大友氏も、幕府命令をてこに産地からの採掘、運搬、精錬といった硫黄産業の整備を進め、室町時代の豊後は日本一の硫黄産地に成長したのです。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

＝月1回掲載＝